

SDGs 達成に向けた「日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」教材



鯨船祭りから考える 生物文化多様性

第1章 | 鯨船行事と富田地区

鯨船行事とは？

鯨船祭りで親しまれている「鯨船行事」は、鯨を豊漁と福を招く象徴として継承されてきたとされ、三重の北勢地域と熊野地域で現在も続いています。熊野地域では江戸時代に捕鯨がおこなわれていましたが、富田地区がある北勢地域では、捕鯨がおこなわれた記録はありません。

北勢地域の鯨船行事の起源は定かではありませんが、捕鯨技術の発展の地とされる知多半島の師崎との関係などの説があります。

富田地区の鯨船行事では、船に彫刻と幕で飾られた屋形が設けられ、北島組・中島組・南島組・古川町の4台の山車が使用されます。祭りは8月14・15日に、山車とクジラがそれぞれの組のまちを練り歩く「町練り」、鳥出神社に奉納する「本練り」があります。練りでは山車に乗っているオドリコと呼ばれる少年が、竹や漁網で作られたクジラをしとめる構成になっています。

富田地区には、捕鯨に関わる民話があります。親子の鯨を漁師たちが仕留めたことにより、そのたたりとして不漁が続いたというものです。伊勢神宮で親子鯨の霊を慰めると、魚が戻ってきたので、それ以降、鯨を捕ることをやめたという言い伝えがあります。

出典：三重県総合博物館第31回企画展「集まれ！三重のクジラとイルカたち」、
<https://tomida.org/maturi/newkujira.html>

写真（上）鯨船山車（撮影：中島稜太）

写真（下）鯨船行事（出典：<https://www.city.yokkaichi.mie.jp/kyouiku/kujirabune/dashi.html>）



富田地区とは

富田地区は、四日市市の北東部に位置しており伊勢湾に面しています。富田は3つの地区から構成されています。浜地区は漁業を生業として発達し、高地区は商業地域として発達、茂福地区では農地が広く残っています。

江戸時代には、東海道五十三次の桑名宿と四日市宿の「間の宿」として栄えていました。現在では四日市市に合併しましたが、桑名の文化的アイデンティティが残っています。桑名の焼き蛤は、実際は桑名藩であった「富田の焼き蛤」の事であり、富田立場（休憩所）が設置されて売店で蛤を売っていたと言われていました。

鯨船行事がおこなわれる鳥出神社は、延喜五年（905）頃にはすでに存在していました。社名の由来は「倭建命の白鳥に化して飛出給ひし地なる故に鳥出といふ」とあります。また、富田の地名は登利傳（とりでん）が訛ったものと言われている。また一説には、その鳥が名古屋国際会議場がある白鳥地区に飛来したとも言われています。



写真：富田地区内（撮影：中島稜太）

第2章 | 伊勢湾の漁業と生き物

漁業生物

伊勢湾には、さまざまな生き物が生息しています。伊勢湾北部の平均深度は16mと浅く、木曾三川や鈴鹿川等の三重の河川からの栄養の恵みを受けるため、海の生き物にとって豊かな海が形成されています。三重県内で獲られている魚や貝、カニ、エビなどは200種類以上あります。また、イカナゴやカタクチイワシ、若松のアナゴ等が有名です。河口付近ではアサリやハマグリ等の採貝が盛んで、沿岸一帯では黒ノリ養殖がおこなわれています。

他方、伊勢湾南部の沿岸には複雑な海岸線があり、沖合には熊野灘といわれる黒潮の暖かく流れの早い海域が広がっています。カツオやマグロ等の近海・沖合漁業が盛んであり、ブリ、アジ、サバ等の回遊魚が豊富です。

伊勢湾内では毎年6月頃から11月頃にかけて、海水中の溶存酸素濃度が減少する「貧酸素」といわれる状況が発生します。貧酸素の主な原因は、河川を通じた農業用水や下水の流入による栄養塩の増加などによる、人為的な富栄養化です。おもに底層部を中心に発生し、生物の窒息死を招くなどの問題を引き起こします。

出典：三重県漁業協同組合連合会 <http://www.miegyoren.or.jp/fisheries-in-mie/>



写真：（上から）大型定置網漁業、のり養殖業、さんま棒受網漁業 (<http://www.miegyoren.or.jp/gallery/magazine/>)

伊勢湾とクジラ

世界・日本のクジラ：鯨類は、歯を持つ「ハクジラ類」と、歯はなく上顎にクジラヒゲを持つ「ヒゲクジラ類」に大別されます。世界には鯨類が約83種いるといわれています。鯨類の中には、一般的に言われるイルカも含まれており、生物学的にはイルカといわれる分類は存在していません。鯨類のうち、国際捕鯨委員会（IWC）が管理対象としている鯨は、大型の鯨類で13種（その後の研究により別種とされる等により実質17種）です。現在、日本で捕獲されているIWC管理対象の鯨は、ミンククジラ・ニタリクジラ・イワシクジラの3種です。ミンククジラは、世界中の海に分布しており、最大体長は11m、寿命は50年といわれています。ニタリクジラは世界中の熱帯から温帯の海に分布しており、最大体長15.5m、寿命は不明です。この2種が日本で主に食されています。

伊勢湾と捕鯨：日本の捕鯨の歴史は三つの時代に分けられます。①「初期捕鯨時代」：漁師たちが臨時的に組織を整え、鯨を地域に分配。②「古式捕鯨業時代」：鯨の産物を商品として流通させるため、専門の捕鯨集団「鯨組」を組織。③「近代捕鯨業時代」：ノルウェー式砲殺捕鯨法による捕鯨。このうち、古式捕鯨の始まりの地は、1570年代初頭の伊勢湾沿岸といわれています。平安時代末期に水軍が活躍し、組織的な操舟技術と高度化した鉄製の武器が古式捕鯨につながったと伝えられています。

三重県のクジラ：捕鯨が盛んにおこなわれていたのは熊野地方です。三重県では、18種のハクジラ類と7種のヒゲクジラ類の合計25種のクジラを海で見ることができます。



出典：<https://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no54/07.html>

図：紀州熊野大地三輪崎鯨方捕鯨図
（出典：<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/222914>）

第3章 | 捕鯨の賛否

国際的な捕鯨議論

規制の流れ：捕鯨に対しては、半世紀以上にわたって、国際的な賛否の議論が繰り広げられてきました。捕鯨活動を管理・規制するため、1931年にジュネーブ捕鯨条約、1937年には国際捕鯨取締協定などが結ばれました。セミクジラとコククジラの禁漁や、漁期制限、未成熟個体の捕獲禁止などの管理に加えて、鯨油の生産調整も行われてきました。

国際捕鯨委員会の設置と規制の強化：1946年には、国際捕鯨取締条約が結ばれ、同条約に基づいて、1948年に国際捕鯨委員会 (IWC) が設置されました。捕獲枠は1963年以降大きく縮小され、1966年にザトウクジラとシロナガスクジラは禁漁となりました。

日本の対応：1950年代には、「捕鯨オリンピック」方式（取ったもの勝ち）により、日本が高い捕獲量を占めていましたが、1982年、IWCに反捕鯨国が多数が加入したことにより、「商業捕鯨モラトリアム（一時停止）」が採択されました。その後、商業捕鯨の停止は30年間以上継続しています。商業捕鯨再開派と反対派の意見対立の溝は埋まることなく、2019年に日本はIWCを脱退しました。現在では日本の200海里水域内で商業捕鯨をおこなっています。

捕鯨賛否の意見：捕鯨の反対理由はさまざまですが、主たるものは、クジラ愛護の視点、種の絶滅の視点、観光資源の視点から反対されています。他方、賛成派の主張は、伝統文化としての視点、資源利用の視点、愛護の視点への反発、生態系のバランス維持の視点などから展開されています。持続可能な社会づくりにおける捕鯨の位置づけについて、考えてみてください。



出典：https://www.huffingtonpost.jp/entry/whaling_jp_5caaf308e4b047edf95c773d

考えてみよう！

- Q 1 . 鯨船行事では、クジラがどのような存在として扱われていましたか？
A. _____
- Q 2 . 捕鯨の賛否についてワークショップで議論しました。あなたは、持続可能な社会づくりとの関わりの中で「捕鯨」はどうあるべきだと考えますか？
A. _____
- Q 3 . ワークショップでは、クジラにまつわる文化や伊勢湾周辺の自然環境を学びました。SDGs（持続可能な開発目標）の17ゴールとのつながりをいくつか見つけることができましたか？



キーワード：

クジラ、漁師、漁業、伊勢湾、捕鯨、富田地区、国際捕鯨委員会(IWC)、商業捕鯨モラトリアム、鯨食文化、無形文化遺産、クジラひげ、鯨油、捕鯨反対運動、鯨船山車、四日市・桑名、など

第4章 | ワークショップ開催報告 (2022年10月15日(土)10時30分～15時30分実施)

鯨船行事と漁村文化について学ぼう

2022年10月15日、三重県四日市市の富田地区において、鯨船行事（鯨船祭り）をテーマに、祭りの魅力や伊勢湾の漁業文化を学ぶとともに、クジラとサステナビリティに関する課題を学ぶワークショップを開催しました。

学びのセッションでは、富田鯨船保存会連合会会長の加藤正彦氏より、鯨船行事に見る漁村文化についての講演がありました。その後のまち歩きにおいては、地元の食堂での昼食、加藤氏の案内のもと漁村として栄えた古い町並みや漁港、鯨船行事で使用される山車の見学等をおこないました。

加藤氏の講演は、富田地区の歴史及び約250年前から伝わる全国でも珍しい陸上での模擬捕鯨である鯨船行事についての解説が、資料と映像を混ぜておこなわれました。戦後、富田のまちが変化しつつも、海に向かって町割りが縦長になっている漁師町の文化とその町割りに沿った4つの組でおこなわれる鯨船行事との密接な関係を学ぶことができました。

まち歩きでは、講演に引き続き加藤氏の案内のもとおこなわれました。昼食後に水産加工場へ行き、天日に広げられた煮干しの加工を見学しました。また南島組の組長さんのご厚意により、南島組の鯨船である感應丸が収められている鯨船蔵を見学しました。鯨船は普段は見るできない屋形部分が解体された状態で、貴重な体験でした。



日本の捕鯨文化について考えよう

富田地区の鯨船行事から話題を拡げ、日本と世界の捕鯨について学びました。中部大学人文学部教授の末田智樹氏より「日本の捕鯨文化とは」と題した講演をおこない、中部サステナ政策塾の塾生の中島稜太氏より「捕鯨に関する国際的議論」についての話題提供をおこない、鯨肉を食べながら、参加者と講師とともに捕鯨に関する対話をしました。

末田氏の講演では、鯨船行事を学ぶとともに日本の捕鯨の歴史を学びました。捕鯨の文化は長く、縄文時代の遺跡からも捕鯨の痕跡があり、文化として脈々と受け継がれてきました。しかし、捕鯨の技術が発達し、一部の地域では取り尽くされてしまったという事実もありました。捕鯨を基礎とした社会的・技術的等の様々な要素が結びついた独特の生活様式が成立した捕鯨文化も存在していたという知見を得ることができました。

中島氏の国際的な捕鯨に関する説明の後に、参加者と講師との捕鯨の議論をおこないました。賛成と反対を表明してから意見を述べるという形式でした。賛成派が多く、捕鯨文化の大切さについての意見もありました。また反対派は少なかったものの、捕鯨は賛成だが現状では捕るべきではないという意見もありました。

